九条はらまち

「はらまち九条の会」会報　No. 119

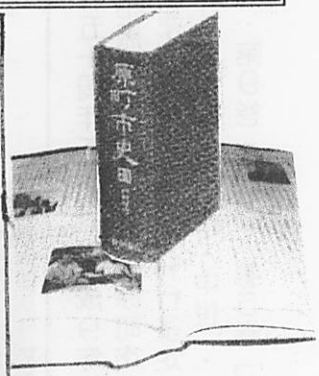
2009（平成21）年12月19日（土）発行

＜1909（明治42）年12月19日、埴谷雄高の誕生日。今年は生誕百年です＞

○小説家、評論家の埴谷雄高はにやゆたかは、本名般若豊はんにゃゆたか。台湾の新竹生まれ。日大予科中退後、共産党に入党。不敬罪などで昭和7年に検挙。獄中でカントを読み、生涯の文学的・思想的主題を得る。敗戦直後から同人誌「近代文学」に連載され、作者の死で途絶えた長編『死霊』（昭和21～）では哲学的考察を小説の形で提起した。**（東京書籍『新総合図説国語』より）**

○父方の家系は小高区の相馬藩士で、「雄高は小高より発せり」と語り、小高には生涯愛惜の念を持ち続けた。小高区の浮舟文化会館内に、立派な「埴谷・島尾（敏雄）記念文学資料館」があります。

○19日、生誕百年と南相馬市中央公民館開館記念、埴谷雄高についての「小森陽一講演会」が開催されます。



南相馬市が今年二月に発行した**『原町市史』**第十一巻特別編Ⅳ「旧町村市」**（写真）**が、今年の**第三十二回福島民報出版文化賞の特別賞を受賞**しました。「行政、経済のほかに生活面の歴史にも光を当て内容の充実ぶりや写真の多彩さ見やすい構成などが秀逸」と高く評価されての受賞です。

旧原町・高平村・太田村・大甕村・石神村ごとに編纂。アジア太平洋戦争と原町市民との関わりも詳しく記述され、戦争体験も数多く収集されています。その中から特に「戦争によって変えられた葬儀」をコピーしました。**（掲載については、市史編纂事務局のご理解と承認を得ています。）**

戦争によって変えられた葬儀

池田取松（池田十伍氏所蔵）

太平洋戦争が、人びとの生活に与えた影響ははかりしれませんが、ここでは、本巻編纂にかかる聞き取り調査を重ねるなかから得られた、特異なエピソードを一つ紹介しましょう。[*1]

太平洋戦争も敗色濃くなった昭和二十年（一九四五）七月二十八日、原町大字上渋佐（現原町区上渋佐）に住んでいた一人の老人が亡くなりました。彼の名は池田取松。壮年時には町会議員なども務め、地域のまとめ役として、人びとから信頼されていた人物でした。[*2] また、見識が高く気骨ある人柄であったことでも知られ、太平洋戦争がはじまってまもなく、池田家の屋根に火が着いたという想定で、上渋佐の人びとがバケツリレーの訓練を行っていた際には、「萱屋根から火が出たら、簡単に消えるわけあんめぇ」とか、開戦当初に勝利したことを聞いて、「『ションベン勝ち』にならければいいけどな」などと、居並ぶ警察さえも気にせず発言して、周りをひやひやさせたそうです。[*3]「ションベン勝ち」とは、地面にした立小便が見る見るうちに乾いていくさまを表現したもので、小さな勝利があっという間に雲散霧消してしまうようすを、皮肉を込めて言い表した言葉です。取松は、太平洋戦争開戦当初から、勝てないどころか「今に負けるぞ」と家族に話していたといいます。

取松はたくさんの息子や孫たちに恵まれ、かりに不測の事態が起こったとしても、充分に対処できるはずでした。ところが、戦時体制がこうした状況を奪ってしまったのです。青年になった孫たち三人は徴兵され戦地に、もう一人は軍需工場勤めにと、ふるさとから遠く離れた地へと赴いていったのです。こうして、家には取松の妻をはじめとする女性たちと、まだ学校に通っていた小さな孫たちだけが残されることになったのです。

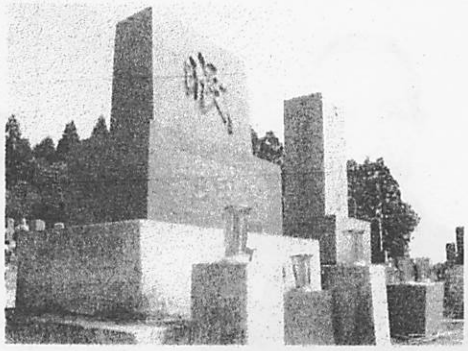
ここで困ったのは、葬儀の際に必ず必要なロクシャク（陸尺）の人選でした。棺を運ぶこの役は、既婚の成人男性が務めることになっており、独身や年の若い男性は従事しない慣習でした。[*1] しかしながら、戦時下の徴兵制度は、村々から男性を奪っていってしまっていました。

そこで、白羽の矢が立ったのが、取松の外孫である湊昭男氏でした。湊氏は相馬農蚕学校を卒業し、当時一九歳の若者でした。通常であれば、未婚者、しかも十代の若い男性に、ロクシャクを依頼することなどは、当時の常識のなかでは異例といえましたが、適任の男性がまったくいないという非常事態ではやむを得ない選択でした。

さらに、取松が亡くなったその晩からも、また異例の連続でした。まず、戦時中という社会状況を考慮して、葬儀はできるだけ簡素かつ速やかに行うということで、亡くなった当日の晩が通夜となり、翌二十九日に告別式を執行するという急ぎぶりで、夏ということを考慮しても瞬く間の葬儀だったといいます。

ところで、池田家の宗派は浄土真宗（一向宗）であったので、遺体は火葬するのが習わしでしたが、戦時中の社会状況はこれを許しませんでした。なぜならば、火葬する時に立つ煙が、空襲の目標とされることを恐れたためです。こうして、取松の遺体は火葬されることはなく、池田家代々の墓所に湊氏ほかロクシャクの人びとの手で掘った穴に埋葬されました。

このエピソードからは、人の死を悼み、故人の冥福を祈るための厳粛な儀式である葬儀でさえも、変更せざるを得ないという、戦争が生んだまったく異常な社会が現出されていたことがわかります。また、取松がこの世を去って約半月後の八月十五日、はたして、日本は彼の予測どおりの道筋を歩み、敗戦を迎えたことは、はからずも彼の見識の高さを雄弁に物語っているといえるでしょう。


池田取松墓所（上渋佐）

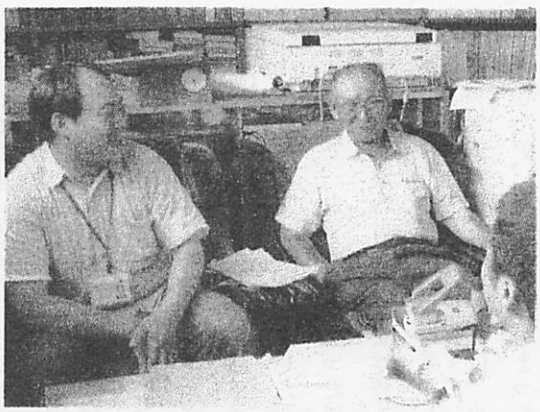
＊1　本コラムは、平成十九年十月、湊昭男氏からの聞き取り調査によるものである。

＊2　池田取松は、大正二年六月～十年五月までと、大正十四年六月～昭和四年五月の合計三期一二年間、原町町会議員を務めている（大正二、五、十四年『原町会々議録』）ほか、新田川鮭蕃殖漁業協同組合の役員なども務めている（「鮭蕃殖組合新役員」『福島民報』大正六年十一月二十五日付）。

＊3　平成二十年二月、池田十伍氏からの聞き取り調査による。

＊4　ロクシャクとは、「陸尺」とも「六尺」とも記され、当時は葬列で棺を運んだり、火葬の際には火の番、土葬の際には墓穴を掘ったりする役目である。当地域におけるロクシャクの役割や葬送習俗については、南相馬市教育委員会編『原町市史』第九巻　特別編Ⅱ　民俗（二〇〇六）に詳しいので、あわせて参照されたい。

（渡部恵一）


祖父池田取松の思い出を語る湊昭男氏（湊民俗資料館にて）

『原町市史』は、市が市制五十周年を記念し平成9年度から編集を開始。合併して南相馬市となっても、『原町市史』として平成14年度から25年度まで、計十一巻を刊行予定です。これまで刊行されたのが、第4巻「古代・中世」・第10巻「野馬追」・第8巻「自然」・第9巻「民俗」・第5巻「近世」・第1巻「旧町村史」の6巻で、各巻とも専門の編纂委員の方々の、長い歳月をかけての綿密な調査とご労苦と熱意によりまとめられたものです。「なにもない原町」ではなく、数千年にわたり、すぐ身近なところにこれほどの生活の軌跡や、歴史が眠っていることに驚かされます。

全国の「九条の会」では　◆全国の『九条の会』は、04年6月の“アピール”以来7，500以上に増え、地域・職場・医療者・映画人・図書館・科学者・美術・スポーツの『九条の会』ができ、家族・ひとりの会など多様です。◆医師や弁護士、僧侶や牧師さんがリーダーになっていたり、宮城や高知県では自民党の旧市町村長の『九条の会』ができ活発に活動しています。◆長野県下諏訪町は人口22,000人ですが、『しもすわ九条の会』では9条を守る住民の過半数の署名を集めました。県内いわき・相馬市九条の会でも発足以来、署名活動を継続中です。◆『会』の活動のあり方として、「一人ひとりの創意や地域の持ち味を大切にした取り組みを」「継続的、計画的に」「小学校区単位の『会』結成を」「交流・協力のネットワークを」とよびかけています。